

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 日賀優一

「答えが1つではない問い」を考える高校生向け対話型ワークショップを開催する「三四郎の学校」事務局長。本誌2016年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりに携わる。

全国の事例紹介

対話的な会議・研修

学校として育成を目指す資質・能力を検討したり、グローバル化を始めとする社会の変化に対応する教育のあり方を考えたりするため、全国の高校で対話を重視した会議・研修が行われています。今回は、実際に行われた会議・研修の3事例から、思考を拡散させたり、収束させたりする山場となる部分を中心にご紹介します。いずれの会議・研修も、未来の学校や教育のあり方について自由に語り合うもので、学校としての1つの答えをその場で決めるものでは

なかったことが共通点です。そして、語り合うだけで終わるのではなく、未来を見通した上で明日からをどのように過ごしていくのかを考え、具体的な行動へとつなげようとした事例です。なお、実際に行われた会議・研修では、紹介した部分以外に、緊張を解きほぐすためのアイスブレイクが盛り込まれたり、考えたことをさらに深める語り合いの場が後日設けられたりしています。自校の課題を語り合う場をつくる際の参考にいただければ幸いです。

CASE 1 生徒の長所から育てたい生徒像を検討

所要時間 120～150分

会議の大まかな流れ

1. 自校の生徒の長所を洗い出す ▶ 30分

教科・学年が混在した教師4、5人から成るグループで、生徒の強みやよいところを、できるだけ多く出し、全体で共有する

2. 生徒に最も必要な資質・能力を議論 ▶ 30分

生徒を肯定的に捉えた上で、生徒に最も身につけさせたい資質・能力は何かを、グループ内で語り合う

3. 資質・能力と必要な指導を検討 ▶ 30分

一人ひとりが、身につけさせたい資質・能力とその育成のために求められる指導を紙にまとめ、グループ内で発表

4. 教科・学年で語り合いの成果を共有 ▶ 30分

教科団や学年団に分かれて、それまで語り合ってきたことと、自分が取り組みたいと考えていることを共有する

校長を始め全教師が参加し、「これからの学校」を考えた会議です。この学校は、ここ数年、授業も部活動も休みとなる創立記念日の半日を、教師の対話の場として活用してきました。

会議では、誰もが気軽に楽しく語り合えるように、「本校の生徒の強み、よいところ」を、具体的なエピソードを交えて語り合うことからスタートしました。HRや授業、部活動で見た生徒の輝く姿を語り、気持ちを十分に前向きにしてから、「いろいろなよいところを備えている本校の生徒だからこそ、さらに伸ばしたり、改善したりしてあげたいところ」を語り合いました。長所を土台にして短所を語り合うことで、解決策等の見通しも立てやすくなります。

会議の最後では、教科や学年の単位でグループをつくり直しました。その意図は、語り合いの成果を教科や学年の財産として共有し、指導の改善のヒントにしてもらうことにあります。

Point

- ・生徒の長所から語り合うことで、会議自体の雰囲気を知るものに行える
- ・教科や学年で議論する前に、教科・学年を混在させて語り合うことで、思考を拡散させることができる

語り合いの記録には、模造紙とマーカーペンを使用しました。文字が見やすくなり、グループの中での意見共有がスムーズになります。



CASE 2 生徒と教師が社会に必要な資質・能力を語り合う

所要時間 60～90分

研修の大まかな流れ

1. 10年後の社会についてイメージを共有 ▶ 20分

生徒と教師が混在する4、5人から成るグループ内で、10年後の社会はどのような社会で、どんな資質・能力が求められるのかを語り合う

2. 社会に必要な資質・能力を育む方法を考える ▶ 20分

これからの社会で求められる資質・能力を育むためには、高校(教員)生活をどのように過ごせばよいのか、生徒と教師がそれぞれの立場で考えを述べる

3. 必ずできる小さな一歩を宣言する ▶ 20分

生徒と教師が「これからの社会で求められる資質・能力」と「その資質・能力を身につける(育む)ために、必ずできる小さな一歩」を考え、宣言する

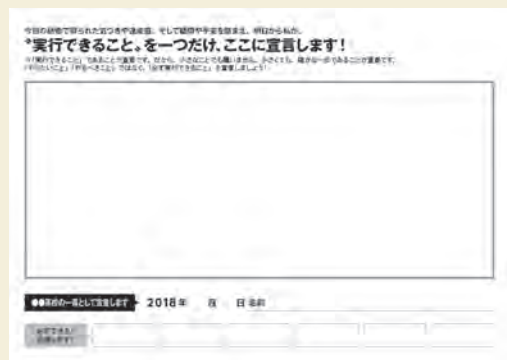
Point

- ・生徒と教師が語り合うことで、より多様な価値観が生まれる場となる
- ・生徒と教師が高校生活・教員生活における決意を共有し、それぞれの行動変容を促す

育成を目指す資質・能力を考える教員研修を開催し、そこに生徒も参加させた事例です。「これからの学校を話し合うのであれば、未来を生きる生徒の声も聞きたい」という教務主任の発案で、生徒会役員を中心に十数人の生徒の参加が実現しました。

これからの社会をイメージした上で、「求められる資質・能力は何か」「その育成のためにはどんな高校(教員)生活を送るべきか」を生徒と教師が同じテーブルで語り合いました。その上で、生徒、教師がそれぞれの立場で、これから自分ができること、変わるべきことを考え、宣言しました。参加した生徒から、「先生と初めてじっくり話ができた」と喜びの声が多く上がりました。

語り合いの最後に、「必ずできる小さな一歩」を宣言しました。グループの中で承認し合うことで、変化・変容のモチベーションを高め合いました。



CASE 3 学校の重点目標を具体化、個別化する

所要時間 90～120分

会議の大まかな流れ

1. グローバル社会に必要な資質・能力を議論 ▶ 30分

教科や学年を混在させた教師4、5人から成るグループ内で、自校が考える「グローバル社会に必要な資質・能力」を議論する

2. 高校の諸活動と結びつける ▶ 30分

グローバル社会で活躍する人材に育つのは、高校生活のどのような場面で、どのような行動ができる生徒なのかを考える

3. グローバル化させる仕掛けを検討 ▶ 30分

グローバル社会で活躍する人材を育成するために、学校にどのような場を意図的につくっていくのかを語り合う

Point

- ・学校の重点目標として共有されているキーワードを改めて議論し、深める
- ・語り合いの成果をプロジェクトチームなどが引き継ぎ、さらに議論を深める

学校の重点目標として掲げる「グローバル教育の充実」が、一部の教科や学年の課題にとどまっているという問題意識から、全教師が集まって、「グローバル教育」について改めて語り合う場が設けられました。

会議では、教科や学年を混在させたグループでグローバル社会で求められる資質・能力を語り合いましたが、「保健体育などの実技教科はグローバル教育の基点になる」「HRや部活動にグローバル教育の観点を取り入れたい」など、日々の指導と結びつけた意見が多く出ました。それらの意見を集約して、グローバル教育を推進する部局が、教科や学年を横断したグローバル教育の指針を打ち出し、校内に発信していくことになりました。

グローバル社会で活躍する人材像をイメージした上で、それを学校の諸活動と結びつけていくためのワークシートを使用しました。

2030年を生きるグローバル人材

①「大学、社会で〇〇なときに、〇〇な場面で」できる人



②「授業、部活、行事で〇〇なときに、〇〇な場面で」できる人